

飛躍的に発展させるために何故必要なのかという、必然性の問題としてこのことを提起し議論することの意義は軽減することになると思えるのである。

守護領国制の研究は日本における封建国家・封建王制との関連で新たな課題を背負ってふたたび活発になろうとしている。畑井弘氏の本書には、その手がかりが、随所にふれられているし、それをどう汲みあげて体系化してゆくかが、中世後期研究者にとつての今後の一つの重要な仕事であろうと思う。

(A5判 四九五頁 一九七五年一〇月 吉川弘文館 六〇〇〇円)

(立命館大学文学部教授)

大久保英子著

「明清時代書院の研究」

森 紀 子

中国史において書院とは、単なる私立の学校という名目をこえて、読書人が新思潮を鼓吹し、時政を論議し、在野世論を形成する場として、果ては政治闘争の場として、文化的、思想的のみならず、政治的、社会的に物議をかもした存在であった。

『明清時代書院の研究』という題目は、しかるが故に、十分我々の興味をそそるテーマといえよう。

従来、書院に関する研究としては、盛朗西の『中国書院制度』や、劉伯駿の『広東書院制度』など、その制度的な側面、すなわち書院そのものに密着した詳細な研究があった。

しかし著者は、それらの研究が、いまだ書院の社会経済的背景をトータルに考察するものでないことに不満の意を表し、政治・経済・社会・文化との関連から書院をとらえようと、意図せられているのである。

著者はその考察の対象を、泰州学派の拾頭に初まる明末清初、清中期、清末変法運動の三時期にしばっていられるが、それぞれ、書院の社会的役割が増大した時代として、妥当な選択と思われる。内容紹介をしながら、コメントをしていきたいが、すべての項目にわたりにえないことをおもう、まず全体の構成を示したい。

第一章 明清書院の概観

第一節 書院の機構と変遷

第二節 洋務運動と書院の実学教育

第二章 地域別書院概要と分布

第三章 明代書院における庶民層の抬頭

第一節 泰州学派と書院

第二節 東林書院と社会

第三節 明末復社と社会

第四節 明末読書人結社と教育活動

第五節 復社における出身層と社会

第六節 清代考証学とその教育思想

第四章 清代書院と商人

第一節 山西商人と書院

第二節 安徽商人と書院

第三節 江西・湖広地方の書院と商人

第四節 江蘇・浙江地方の書院と商人

第五節 福建・広東地方の書院と商人

第六節 辺境地方の書院と商人

第五章 戊戌変法と書院

第一節 顔元・王船山——清初啓蒙思想の実学思想と道器論

第二節 朱九江と礼山草堂

第三節 康有為と長興里学舎(万木草堂)・桂林書院の教育

第四節 梁啓超の教育思想

第五節 康有為の経済思想とその発展

第六節 広雅書院と実学教育

第七節 湖南新政運動の概略と書院改革

第八節 湖南書院の新政反対運動

第一章は文字通りの概説である。書院の機構として主講者である山長(院長)、総務をあつかう監院、斎長、学生等の職務内容について、あるいは書院の経費、学約等の全般的な説明がほどこされるとともに、明末清初の書院抑圧時代を経て、従来、私立が原則であった書院を官立化させた、有名な雍正十一年の詔勅をテコとしての書院隆盛時代。ウエスタンインパクトにゆれる清末、洋務運動の中で西洋的実学を希求する過程での書院の改革、しかし科挙の廃止にともない書院が学堂に変化する書院終末時代といった歴史変遷がのべられている。

第二章は統計的な部分で、様々な表やグラフをつかって、地域的な書院分布(辺境地方以外はほぼ全国に差違はない)、時代別創建数(乾隆が最高である)、設置者、捐銀者、捐地者等が分類、表示されている。以上を導入部として、第三章からが本論である。

第三章のテーマは、泰州学派、東林、復社という明末清初にかけての読書人の運動である。ここでの関心は、書院そのものよりも、書院に集結し、政治社会運動を推進していった人物群により多くむけられている。

王陽明の良知の学が、天下を席卷するにつれ、活発な講学活動が行われる。この講学の場である書院は時流となるとともに、弾圧の対象ともなった。かような情勢の中に抬頭してきたのが泰州学派である。戦後の明代思想史の中で、一躍脚光をあげたこの学派の創始者、王心斎は、泰州、安豊場の塩丁の出身であった。

著者はこの王心斎ゆかりの心斎講堂と、同じく泰州の塩場であ

る東台場にたてられた泰東書院、休寧県にたてられた環古書院の三つを、泰州学派の書院としてとりあげ、そこに集った人々を一人一人紹介していく。

著者の列挙するままにながめていくと、心齋の直接の門人が結集した心齋講堂のメンバーが、圧倒的に宦籍出身であることに、今更のように気づかされるのである。それも、かなり豊かな宦戸（宗部・盧源永など）がこの講堂のバックボーンとなっているようである。

佐伯富氏（『清代塩政の研究』）によれば、嘉靖初期において、すでに宦戸には階級分化がみられ、貧宦、富宦が判然とわかれていたということである。さらに万暦年間には、両淮の宦戸は宦籍によって科擧の上に特典を附与せられ、その社会経済地位の上昇が伺えるという。

この宦戸の階級分化は、王心齋自身の目にもはっきり映っていたことで、彼は宦戸の生産手段である草蕩（製塩の際の燃料生産地）を均分することを建議しているのである。侯外廬氏は、この事実を指摘するとともに、この「均分草蕩」に、封建独占に反対する平均主義小私有の性質をみとめている（『中国思想通史』）。

かような王心齋の理想主義を含みながら、しかもこの泰州学派の背景にあるものが、社会的に上昇していく富宦であったろうことはきわめて推測しやすい。万暦十八年にたてられた泰東書院も、宦籍の子弟が入学したと考えられると著者はいう。たとえ明代の書院の性格が、より多く講学の書院であったとしても、前述の科擧政策と、何らかの必然性をもったであろうことは、想像にかたくない。

王心齋が塩丁出身であり、その学派が農・工様々の庶民層をつつむものであったことは、一般的にいわれていることであるが、その成立の母体をみる時には、かくして産塩地、泰州という特殊性に、あくまで固執した方がよいようである。

実際のところ、この一節の基となった論文「泰州学派とその社会的基礎」（『東洋史学論集』第三、一九五四）では、著者自身が王心齋の一族の出身を系譜的にあとづけ、泰州学派発展の背後に、富宦の力のあることをはっきり指摘している。にもかかわらず、本書ではかような部分がすべて削去され、書院関係者を列挙して、泰州学派の庶民性という一般的指摘にとどめているのはどういうわけであろうか。本書では、後に清代の書院と塩商との関係が論じられるのであるから、その前提としても、泰州学派と富宦との関係は、もっと強調されてもいいのではないか。

又、張居正の書院彈圧に関しては、軽くふれられているだけであるが、張居正と泰州学派との書院講学をはさんでの対立についてもつっこんだ考察がなされれば、泰州学派の運動としてのダイナミズムがより鮮明になったであろう。

つづいて第二節では、東林党の政治活動が簡単にスケッチされ、顧憲成が商人出身であったことを初めとして、東林書院にあつまった層が、上は縉紳から、商賈、無頼に至るまでの幅広いものであったことに、著者の関心が向けられ、それと関連して、開説の変や、織造を停止することを請うた、李邦華の上奏文にみられる東林の機戸擁護の動きに注目が払われている。

三、四、五節は復社についてである。厳密に言えば、文社は書院とは性格を異にするものであるが、東林書院の政治活動のあと

を直接にうけついで、明末清初の読書人の総合体として、必然的にとりあげられるのである。

ここでは、復社の成立過程から、中央官僚との対立抗争のあらましを概観した上で、著者は、復社の郷村における教化活動や、個々の社員の様々な善政を、庶民の側にたつ行爲として、丹念に収集し、かつ、東林党人には圧倒的に中央官僚が多かったのにひきくらべ、復社のメンバーの出身層の性格として、①科挙に不遇な人物が多かったこと。②非常に貧しい下層読書人がいたことを、個々の事例を克明にあげて実証しようとしている。あるいはまた、張溥の母が婢であったことかかわらせて、復社が一人の奴婢を解放して、復社で学ばせた事件を特筆している。

総じて、貴賤をとわぬ幅広い層を含んだ東林、復社の活動の背景にあったものは、市民層の庶民的な力であったとする。

ところで、復社に関する論文として、近年宮崎市定氏が「張溥とその時代」(『東洋史研究』三十三—三、昭和四十九年)をかかれているが、前述した著者の、復社の性格づけとは、大分対立する見解があるようである。参考のために、呼応するところをぬきだしてみよう。

宮崎氏は、東林、復社の活動において、中心的な役割を果たしたのは郷紳層であると、まず断じる。復社においては、確かに東林党がエリート官僚集団であったのにくらべ、その成員の多くが下層の郷紳、ないしは生員であったが、それは、むしろ公然と結社活動のできる条件を彼らに付与することとなった。

復社が科挙合格のための、圧力団体としてその勢力を伸張するにつれ、政治活動にもコミットし、遠方にながら中央政府に影

響をあたえた要因としてその大衆動員力と、情報伝達力があげられるが、経済的にも、当時、北方の清軍の脅威の下に膨脹した国家財政支出が、最終的には軍需景気として、郷紳層の中に流れこんだのであり、この現銀が彼らに自信をあたえたのだと推論されている。

また張溥が婢の出生であることにより、奴婢のあなどりをうけたことは、彼をして奴婢の専横を激しく憎悪させることとなり、また概して当時の郷紳層には下層階級を蔑視する風は根強く、張溥の人間観にも何ら新しいものはなく、当時の水準をそのまま現わしているだけだといふ。

ちなみに、大久保氏が、当時江南の弊害とされたいわゆる「紀綱の僕」の横暴を戒しめる張采の「母縦奴僕横」という誓言を、「母縦奴僕」としてあたかも奴婢解放のスローガンのようにあつかわれていのはうなづけない(初めは単なる誤植かと思つたが、先行の論文にもそうかかれていりし、これをうらづける史料として奴婢を主人から解放したという話をもってこられている以上、そう考えざるを得ない)。

やはり復社に論及されている小野和子氏は、復社の運動を、江南先進地帯における、比較的開明的な地主層の、当面の危機(満州の侵入と農民起義の拡大)を緩和させるための政治運動と規定し、張溥が、「紀綱の僕」の横暴に対してはげしい憎しみをいだいていたことと、しかも奴婢の解放に援助を与えたことを、彼らが地主層に出身しながら相対的に地主経済から自立し得る側面をもっていたことと関連させている(「明末の結社に関する一考察」『史林』一九六—二二)。この地主経済から自立し得る側面とは具

体的には、文社が書坊と結びついていたことを指すもので、このことについては大久保氏も文社と書坊、商人との関係として注目し、宮崎氏も世は既に情報時代であり、出版監修業ともいふべきものが、可能になっていったといわれる。都市の読書人の動向をみる上でも興味ひかれる問題である。

こうして復社の基盤となったものを、諸説とりまぜて考えてみると、概して著者の、個々の事例を丹念に検出する方法は、往々にして、上は繙神から無頼まで、あらゆる要素を等しなみにとりあつかうこととなり、結局、庶民的という傾向をあらわす表現に止まり、その中で主要なものは何であったかということ、指摘しにくくしているようである。

第四章の清代書院と商人は、三章とはうってかわって、徹底的に、書院に即しての考証がすすめられていく。各地域別に、その地方の書院の経済的裏づけ、すなわちどのような商人が、その書院にどれほど出資したかという商人との関係が、一つ一つ検出されていくのである。

出資額をぬぎにして、地域別に書院と関係のある業種をあげてみると、山西——解州塩・山東塩にかかわる塩商・運商・典当業。陝西——塩・布・茶・馬・木等の商人・典当業・酒行・油行。華北——塩商・典当。徽州・兩淮——塩商。江西——塩商・典当。湖北——塩商。湖南——茶・塩。江蘇・浙江——綿業・絹業。福建——塩・茶。広東——塩商・洋商などとなっていて、圧倒的に塩商、典当業と書院との結びつきの多いことが実証されている。

著者によれば、これには時代的なものがあるが、塩商が盛行したのは道光までで、それ以後、塩商は衰亡する。典当業の最盛期

は嘉慶から道光で、この時期書院との関係も多くみられるようになる。典当業とのかかわり方は、おもに書院が、その資金を典当業に貸したえ、その利息で書院を運営していくのである。綏徳州では、文典典という書院みづからが経営する質屋もあらわれているということ、おもしろい指摘である。

この書院と典当業との関係については、つとに中村治兵衛氏が「清代山東書院と典当」(『東方学』十一輯)において論及されている。中村氏の関心はむしろ清代に典当業がいかに盛行したかという面にあつたわけであるが、資金貸しつけの具体的な運営状況についても詳述されている。著者はこの山東について紹介された現象を、全国的に採集したわけである。

その他、広東で洋行が経営した書院は、他郷出身者が同業者として、異郷に建設したという特殊な性格をもつといい、また上海に特徴的な書院として、西洋の学問を採用した格致書院などがあげられているが、これなど、後の洋務運動とのかかわりの中でみるべき性格のものであろう。

四川省では、書院と塩商のかかわり方は、他の地方にくらべてうすく、塩商が直接出資した例もなく、せいぜい、塩商に貸しつけて利息でまかなう形がみられる程度で、商学の成立も遅いという。

また、四川省に聖諭広訓を宣講した教化書院がみられることを、邪教が多いという四川省の土地柄と結びつけて解釈しているのは、どんなものだろう。聖諭の宣講は、清朝が郷民教化の政策として、全国的に行つたものであり、実行の度あい熱心か不熱心かは別として、建前としては、どの書院でもみられたのではないだろう

か。

五章は、戊戌変法と書院である。この章では思想史的な側面からのアプローチが試みられ、清末の変法思想の前提となった、清初の啓蒙思想家、顔元と王船山の実学思想、道器論からときおこされ、康有為、梁啓超に及んでいる。

この時期の書院は、広雅書院や湖南の書院にみられるように、中体西用を実現するべく、実学教育の場として改革される一方、あるいは同じく湖南における嶽麓書院のように変法運動反対の中心となるなど、政治的要請にさらされることとなる。

著者は特に、湖南の書院と時務学堂との対立抗争に力を入れて叙述しているが、畢竟この時期については、すでに小野川秀美氏の『清末政治思想研究』という名著があり、本論もこれを追述しているにすぎない。

以上、三時代における書院のあり方が、それぞれ異った視点から論及されたわけだが、きわめて個人的な興味をいえば、資料がほとんど素材のままで提示され、いわば、個々の実例を丹念に列挙していくという著者の方法が、最も發揮されたともいえるべき第四章から示唆されるものが多かったようだ。

他の章では、読書人の運動や、変法思想が前景にでてきて、書院は遠景の感があったが、ここでは書院そのものに即しての論証が行われたため、科挙の手段として、密接に商人とかかわりあっている書院の存在を、社会構造の中に位置づけて、イメージすることができるのである。

明代の書院についても、このように経済基盤が整理されれば、と願われるが、第二章の統計からみても、たまたに学田の所有が記

録されたり、知府や知県が捐地者として顔をだす程度で、史料的に困難のようだ。

大方の感想は、紹介とあわせ、その都度示してきたが、細かなことで二、三気がついたこともあげておこう。

本書は、大量の史料を使用した労作であるわけだが、それだけに多数登場してくる書院名や人名などだけでも索引をつけてほしかったこと。李提摩太、林樂知、傅蘭雅など外人の名前はそれぞれ、タイムシリチャード、Y. J. アレン、J. フライヤーとルビをふるなりした方が親切であろう。なお、傅蘭雅の伝記が不明だということであるが、彼については『中国を変えた西洋人顧問』（ジョン・ナサン・スペンス、三石善吉訳、講談社 一九七五）に相当な紹介があり、つらら A. A. Bennett “John Fryer: The Introduction of Western Science and Technology into Nineteenth-Century China” Harvard East Asian Monographs 24. という專著もある。

全体としてあまりにも誤植が多く、著者の文体が遠意の文体ではないことと相まって首をかき上げることが多かった。第二章のグラフにしても、明らかに年号が入れかわっていると思われるもの、数値のより処の不明なものなどミスが多い。労作に瑕瑾を残すものであろう。

言辞の間、非礼にわたった点はおゆるしをいただいて、以上でつたない紹介をおわりたい。

(A5判、五八七頁、昭和五十一年三月 国書刊行会 一五〇〇〇円)

(京都大学文学部研修員)